

史跡 垣ノ島遺跡

北海道南部の函館にある垣ノ島遺跡は、紀元前 7000 年頃に遡る遺跡です。発掘作業により、先史時代の 6000 年を超える期間にわたる出土品、墓穴、竪穴建物跡の証拠が見つかりました。これらの発見は、先史時代の日本の暮らしに関する知見を提供し、社会的・文化的・精神的な発展の証拠を供与してくれます。この遺跡に隣接する函館市縄文文化交流センター [\[リンク\]](#) は、垣ノ島遺跡からの出土品を展示しており、先史時代の日本の世界について総合的な紹介を行っています。

葬儀と埋葬の慣習の発達

葬儀と埋葬の慣習は、縄文時代（紀元前 13,000 年～紀元前 400 年）の間に大きく発達しました。集落は、紀元前 7000 年頃より、居住地から離れたところに墓地を配置するようになりました。垣ノ島遺跡では、居住地と墓地が別々に見つかっています。この遺跡で発見された最初期の墓穴の一部は、紀元前 5000 年～4500 年のものです。

珍しい副葬品

垣ノ島遺跡の墓穴には、足形のある土版など、幅広い副葬品が納められています。紀元前 5000 年～4500 年頃の形と大きさはさまざまですが、すべてに縄の文様があり、1～2 個の足形がつけられています。足形は 6～18cm で、おそらく子どものものでしょう。逆の面に手形がつけられている土版もあります。

U 字型の盛土

この遺跡では、大きな U 字型の盛土が見える状態になっています。ここには大量の陶器、石器、動物の骨の破片があります。この盛土の一部からの出土品の一部と土壌は、焦げた物質の証拠を示しており、ここで火が燃やされた可能性があることが示唆されています。考古学者たちは、盛土の一隅の地面に掘られた溝を発見しました。これは U 字型の中央部分に至る道である、と考えられています。また考古学者たちは、U 字型の盛土の中央部分に、石棒・剣などの祭祀の道具を含む小さな塚を見つけました。この盛土では、葬儀などの儀式が行われ、供物が捧げられていたと考えられています。

この盛土は紀元前 3000 年頃まで遡ります。おそらく、数百年をかけて築かれたのでしょう。長さは 190m を超え、幅は 120m あります。高さは、一番高いところで 2m に達します。

土器

垣ノ島遺跡では、実に幅広い土器が発見されています。最初期の例は、底部が尖っている土器であり、土に貝殻を押しつけた模様があります。さらに時代が進むと、凝った装飾の漆塗り注口土器や、多くの穴がある香炉のような形の複雑に作られた土器が現れます。これらの製作物は、意匠の感覚が高度に発達していたことや、焼き物の進んだ技術に通じていたことを示しています。

函館市縄文文化交流センター

函館市縄文文化交流センター [\[リンク\]](#) には、垣ノ島遺跡、大船遺跡 [\[リンク\]](#)（車で 10 分）、およびこの地域の他の遺跡からの出土品が展示されています。最も高く評価されている出土品は、「中空土偶」です。この土偶は、野菜畑を耕していた女性によって発見されました。この土偶は、複雑なデザイン、光沢のある仕上がり、細かな模様、および保存状態が優れていることで、考古学者や美術史家から称賛されています。この土偶は日本の国宝として指定されており、東京国立博物館、大英博物館（British Museum）、スミソニアン博物館（Smithsonian Institution）など世界中の一流博物館で展示されてきました。

函館市縄文文化交流センターには、展示に加えて体験メニューもあり、編み物や土器など、先史時代のものづくりに挑戦することができます。センターへの入館には少額の料金が必要です。情報は英語でも提供されています。

関連遺跡

大船遺跡 [\[リンク\]](#) は、垣ノ島遺跡から車で 10 分のところにあります。この遺跡では大規模な集落の証拠が発見されており、大きな竪穴建物跡の基礎を垣間見ることができます。北海道の他の遺跡には、大型の貝塚が発見された入江・高砂貝塚 [\[リンク\]](#) や北黄金貝塚、札幌の近くにあるキウス周堤墓群 [\[リンク\]](#) があります。